

Henry James の “The Turn of the Screw” と Jack Clayton の *The Innocents* : 原作の曖昧性をめぐって

名 本 達 也

Henry James’s “The Turn of the Screw” and Jack Clayton’s *The Innocents* : Cinematizing the Ambiguity in the Novel

Tatsuya NAMOTO

要 旨

Henry James 原作の小説 “The Turn of the Screw” を映画化した、Jack Clayton 監督による *The Innocents* は、封切り直後から今日まで、概ね高い評価を受けてきた作品と位置付けてよいだろう。本論では、Clayton 監督が原作の曖昧性を *The Innocents* において、どのように再現しているかに焦点を合わせて検証・考察を試みた。脚本に手を加えた部分については、精神分析的手法による解釈を取り込むことによって、Quint と Jessel の幽霊が出現していないという立場をとっているように見受けられる。その一方で、カメラワークについては、家庭教師の視点以外、つまり客観的なショットの中に彼らが映し出されており、幽霊が実際に出現しているという立場をとっているように思われる。この2つの要素の混在は、曖昧性を巧妙に演出したというよりは、寧ろ、相反する2つの要素を1つの作品の中に残してしまう結果になってしまったのではないかと結論するものである。

序

William Archbald と Truman Capote が脚本を手掛け、Jack Clayton が監督した *The Innocents* は、James の “The Turn of the Screw”¹ (1898) を元にしてしている。この映画は、試写会も行われず、1962年にロンドンとニューヨークで封切られた。今日、好意的な評価が多く、概ね成功であったという見方が定着していると言ってよいだろう。

James は19世紀アメリカ文学のリアリズムを代表する作家として知られるが、中短編の中にはゴーストストーリーを始めとして、超自然の力が介入してくる物語も数多くある。“TS” は、その中で最もよく知られているものの1つだ。原作 “TS” の難解さの1つの側面として挙げられるものの中に、リアリズム的な要素とお伽噺的な要素の混在という問題がある。James は、“TS” のニューヨーク版の「序文」において、fairy-tale は大きく以下のような2つのタイプに分けられると述べている。

Yet the fairy-tale belongs mainly to either of two classes, the short and sharp and single, charged more or less with the compactness of anecdote (as to which let the familiars of our childhood, Cinderella

and Blue Beard and Hop o' my Thumb and Little Red Riding Hood and many of the gems of the Brothers Grimm directly testify), or else the long and loose, the copious, the various, the endless, where, dramatically speaking, roundness is quite sacrificed——sacrificed to fullness, sacrificed to exuberance, if one will: witness at one hazard almost any one of the Arabian Nights. The charm of all these things for the distracted modern mind is in the clear field of experience, as I call it, over which we are thus led to roam; an annexed but independent world in which nothing is right save as we rightly imagine it. ("TS" xvi-xvii)²

幽霊という超自然的存在を小道具として用いているため、もし原作の“TS”がこれまでどのように解釈されてきたかを知らずに映画を観たならば、*The Innocents* は単なるオカルト映画としか受け止められないかもしれない。また、Milesの死という結末が待ち受けていなければ、幽霊がこれといった恐怖を呼び起こす言動をとるわけでもなく、Bly邸での出来事はまさにお伽噺の国の一幕を描いているように受け止められなくもないだろう。

家庭教師が幻覚をみているのであって、実際には幽霊は現れていないのではないかという精神分析的解釈が提起されてからは、この作品が論理的で科学的なアプローチに基づいて読み進められるべきリアリズムによる作品ではないかという可能性が開け、“TS”をめぐる解釈の多様さは百花繚乱の様相を呈するようになってきた。原作の難しさと同様に、家庭教師が幻覚をみているのか、それとも幽霊が実際に出現しているのかどうかを、“TS”の曖昧性を残しつつ映像化することは至難の業であったと思われる。ただ、この点を考慮にいれるとしても、実際に高く評価されている一方で、*The Innocents* には、幽霊出現説と家庭教師幻覚説のうちどちらの立場にたっているのかについて、Claytonが一貫性を欠いていると思われる点も幾つか見受けられる。本稿では、表現媒体の違いには留意しつつ、原作の曖昧性を描くにあたってClaytonがどのような技法を用い、それがどのような効果をこの映画にもたらしているのかについて考察を試みてみたい。

I

“TS”は、James文学の中でも最も物議を醸した問題作であり、原作の作品論に飛び込んでしまうと議論が紛糾することが予想されるので、本論では、映画との比較において必要だと思われる点に絞って議論を進めることにしたい。そこで、最初に原作と映画を比較して、重要だと考えられる相違点を整理しておくことにしよう。映画におけるカメラワークと小説における視点の問題等、技法による違いは後に述べることとして、I章では物語の内容に関わる変更点についてのみまとめておく。ここで言う相違点とは、原作の筋書きを変更したものは勿論のことだが、原作にはなかった出来事を持ち込んだ場合も含めるものとする。

まず、*The Innocents* にあっては、“TS”の冒頭のいわゆるプロローグに該当するDouglasの語りの部分が全て省略されている。映画の場合、余程の超大作ででもない限りは、ほぼ2時間程度の枠にまとめてしまわなければならないために省略されたという可能性はあるだろう。1996年にJane Campion監督によって映画化された*The Portrait of a Lady*の場合でも、冒頭の5分の1はカットされている。Campionは、女性の自立と生き方に焦点を合わせているので、Isabel Archerの生い立ちが描かれる冒頭部分の省略は、監督の狙いからすれば、作品の解釈には影響がないと捉えているのかもしれない。しかしながら、“TS”の場合は、事情が大きく異なってくる。読者は、家庭教師の手記を読む形で“TS”本編の物語を読み進めることになるが、家庭教師、無名の語り手「私」、そしてDouglasの間には親密な信頼関係が成り立っ

ており、都合の悪いことを隠したり、或いは手記の内容を改竄したりしているのではないかという可能性を残している故に、語りの信憑性を揺るがし、読者を疑心暗鬼にさせる効果が生じる。このプロローグの部分をカットしてしまうことは、Miss. Giddens —— *The Innocents* では、女性家庭教師に名前が与えられており、この点も原作と異なっている —— が幽霊を実際に見たかどうかに関する曖昧性を表現するにあたって、その大半をカメラワーク等の技術的なものに頼らざるを得なくなり、原作の奥行きを削いでしまったと言わねばなるまい。

次に着目すべきは、Quint も Jessel も Bly 邸の屋敷、或いは敷地の中で亡くなるという筋書きに変更されている点であろう。“TS” においては、Quint は酔った帰り、村道から道はずれて滑り落ちて亡くなっているが、*The Innocents* では、同じく酔ってはいるものの屋敷の中で階段から滑り落ちて亡くなっている。一方、Jessel については、小説では明確な死因は示されず、家庭教師と Grose 夫人の間で以下のような抽象的な会話を取り交わされ、彼女が Bly 邸を去らなければならなかった理由は、ぼんやりと読者に知らされるだけである。

“Then you [Mrs. Grose] do know what she died of?” I [the governess] asked.

“No —— I know nothing. I wanted not to know ; I was glad enough I didn’t ; and I thanked heaven she was well out of this !”

Yet you had then your idea ——“

“Of her real reason for leaving? Oh yes —— as to that. She couldn’t have stayed.

Fancy it here —— for a governess! . . . ” (208)

これについては、Jessel は妊娠してしまったために Bly には居られなくなったのだらうと推論する Hill の指摘がある (57)。その直後に彼女が亡くなったのは流産等の可能性と関連付けられ、Jessel の離職と直後の死因に一貫性をもたせて読むことができる。ところが、映画では、Quint の死後、親密な仲になっていた Jessel は、彼の死に絶望して Bly の敷地内にある湖に身投げする。2 人が屋敷の敷地内で亡くなるという設定に変更したことについては、それほど大きな効果があるようには思えない。恐らくは、Bly 邸が呪われているかのような印象を観客に与え、オカルト的或いはホラー映画的側面を強調することによって、映画の娯楽性を高めることが狙いだったのではないかと推測される。

あと 1 つ大きな変更であると思われる点を挙げると、Quint の最後の出現において、Miles が亡くなるわけだが、この時の Miles の置かれている状況の違いがある。“TS” では、Miles は家庭教師の腕の中に抱きしめられたまま息をひきとる。詳論には立ち入らないが、幽霊が出現していないとする解釈にあっては、Miles は家庭教師が強ク抱き締めすぎたために窒息死したという解釈と、彼女が Quint のことで少年を過度に怯えさせたために生じた心臓麻痺という 2 つの説があるが、映画では前者の可能性は排除される。というのも、Miles は家庭教師の腕を振りほどき、自力で数歩よろめくように走ったかと思うと、そのまま息絶えてしまう。この場合、Miles が息をひきとる瞬間、彼は家庭教師に抱き締められていたわけではないので、自動的に窒息説は排除されることになる。他にも、Flora のペットの亀 Rupert の存在や、Quint の出現場所と関連付けてシンボリックに用いられる白いバラ、Miles が鳩の首を捻って殺したのではないかという疑惑等、小説には存在しなかった大小さまざまな脚色が盛り込まれている。

II

“TS” を映画化する場合に、「幽霊が出現している」という前提で映画化をするという選択、「出ていな

い」という立場に立つもの、そして、原作同様に出現の可能性を「曖昧」なままにしておくという3つの可能性がある。Recchia によれば、Clayton 監督は、曖昧な領域を多く残そうと努めたが、結果的には幽霊が存在しているという要素を盛り込み過ぎたという (29)。本章では、Clayton 監督が、この点をどのように扱っているのかを、映画制作の手法の観点からみてゆくことにしよう。

まず、*The Innocents* に関しては、幽霊が出現したかどうかについて明確な立場を表明している研究家は実はそれほど多くないということを最初に断っておかなければならないだろう。Mazzella は、幽霊は子供たちと Grose 夫人の悪戯であって、実際には出現していないという立場をとる。家庭教師が Bly の屋敷に来る前に Quint は亡くなっているが、その直後に検死や際限のない噂話があったにも関わらず、家庭教師が塔の上でみた男性を誰も Quint だと特定できないのは不自然だと主張する。そして、一連の幽霊騒動は、Miss. Giddens の到着によって屋敷における自分の地位の低下を恐れた Grose 夫人が仕組んだ悪戯であり、嫌がらせであると推論する (Mazzella 13)。さらに Mazzella は、映画のプロローグで、コックや召使いまで出演者が表示されるが、Quint の名前だけが出ていない点を指摘する (13) —— 実際には、Peter Wyngarde が Quint を演じている。

次に、映画の技法という観点から原作と比較してみることにしよう。“TS” は、物語本編の部分全てが家庭教師の手記である故に、読者は真実を知りたいければ Bly 邸での出来事全てを疑わなければならない。そして、読者が読まされることになる原稿は、語り手「私」が、家庭教師が記した手記を—— (本人の言うところによると) 正確に—— 写し直したコピーである故に、さらに不正確さを伴っている可能性がある。このように、様々な不確定要素が複雑に絡み合って、“TS” 全体を包む曖昧性が出来上がっている。一方、映画の場合、カメラワーク次第で、映し出す内容を Miss. Giddens 個人が見た一人称視点に設定するか、小説の技法で言う全知の視点とするかを、観客に意識させることなく連続的かつシームレスに切り替えを行うことが可能だ。映像の中に Miss. Giddens 自身を映し込んでしまえば観客は全知の視点でその場面を観ていることになるし、家庭教師がその場にいるにも関わらず、彼女を排除してしまえば、それは Miss. Giddens の一人称視点ということになる。カメラの視点は、ズームイン又はズームアウトすることができるので、視点が切り替わることを露骨に観客に意識させることはない。

では、そのカメラワークの具体的な例を Palmer と Wilson の指摘を参考にしながら、みてゆくことにしよう。まず、Palmer は “Editorial omniscience is achieved by seeing the story from all angles, moving in and out of the character’s consciousness” (211) と述べているが、これは小説における視点と比較した時のカメラの扱いやすさと厄介さの両面を示唆している指摘と言えよう。例えば、*The Innocents* の前半においては、Quint が登場する時、観客は Miss. Giddens の視点を通して目撃することになる。同時に、屋敷の中で彼女以外の人物には幽霊が見えていない可能性も暗示される。しかし、後半になってくると、カメラが引いた時に Quint は彼女の肩越しに映し出される (1:37:50)³。つまり、観客は、家庭教師の視点ではなく、自分たち自身の眼で Quint を目撃したことになる。さらに Palmer は、Jessel の出現時にも同様のカメラワークがあり、幽霊の出現に客観的証拠を与えてしまっていると指摘する (113)⁴。

カメラの位置を下げることによって、幽霊と同時に家庭教師をワンショット⁵のスクリーンに入れてしまうことは、小説の技法になぞらえるならば、一人称の視点から連続的に全知の視点へ移行したことになる。このように流動的かつ連続的に視点を変えられることは映画におけるカメラワークのメリットでもあるが、同時に、非常に面倒な側面でもある。というのは、家庭教師を幽霊と一緒にスクリーンに映し出してしまった瞬間に、それは彼女の幻覚ではなく、それが客観的事実であるということを観客に伝えることになるからだ。現実問題として、全編を通じて Miss. Giddens の一人称視点だけに固定してしまうことは流石に無理があるだろう。その一方で Quint や Jessel を家庭教師と同じワンショットの中に登場させてし

まうと、観客に対して幽霊が実在しているという証拠を提供してしまうことになる。視点の問題に限定するならば、“TS” のような曖昧性を持つ作品は、映画という媒体で表現する方が難しいと言えるかもしれない。

上での議論からも明らかなように、小説と映画という表現媒体の差異を議論から排除することはできないだろう。しかし、それにしても Clayton 監督がやり過ぎたと思える部分も存在する。*The Innocents* において、Quint が、屋敷内の彫像——原作には出てこない——とディゾルブ⁶する場面がある。そして、Wilson (113) も着目しているように、Miles が息を引き取る直前の場面 (1:38:02) では、彫像の肩越し、或いは Quint の肩越しから Miles と Miss. Giddens が見下ろされるショットもある。Recchia や Wilson が指摘している通り、カメラワークを中心とする技法の面では、Clayton 監督は、やや幽霊の出現に現実味を帯びさせ過ぎたところがあると言えるだろう。Ⅲ章以下で、幽霊の出現を否定する要素についても検証は試みるが、映画というメディアにあって、客観的なショットに Quint と Jessel が映っているという事実は、幽霊出現の否定を難しくするものと言えるだろう。

Ⅲ

次に、Ⅰ章で言及するにはしたが議論を後回しにした事柄を取り上げてみてゆくことにしよう。原作には登場しなかったけれども、映画では重要な意味合いを帯びて用いられていると思われるのがバラである。Palmer は、“the white roses may symbolize a kind of innocence, purity, and virginity” (204) と指摘して、*The Innocents* におけるバラの役割を詳細に論じている。バラに象徴的な意味合いを帯びさせて用いるというのは、撮影技術とは別物であり、恐らくはシナリオを手掛けた Archbald と Capote のアイデアに負うものであろう。問題は、*The Innocents* 制作の狙いが、原作の曖昧性を残すことを意識した作品であるとすれば、極端にバランスを欠いた出来栄になっているという点だ。その理由を以下で具体的にみてゆくことにする。

前章で、カメラワークについては中立というよりも、寧ろ幽霊が出現しているという側へ軸が傾きすぎた点を指摘した。ところが、上で触れたバラについては、精神分析的解釈を過度に助長する用いられ方をしており、幽霊出現説を否定することに力点が置かれている。“TS” の精神分析的解釈の流れは、簡単に言ってしまうと以下のようなものになる。心理的抑圧状態に置かれた家庭教師は、雇い主である Harley Street に住む紳士が彼女の Bly での活躍ぶりを見に来てくれることを期待して、屋敷の中に男性の姿を探し求めるようになる。その結果、Quint という虚像を勝手に見るようになったのであって、幽霊は実際には現れていないというものである。原作では、Miles と Flora の伯父から家庭教師がどのように仕事を引き受けるに至ったかについての過程は、手記ではなく、Douglas の語りによって読者は知らされる。*The Innocents* では、“TS” のプロローグの部分が省略されているため、Miss. Giddens が紳士から家庭教師の職の依頼を受けるところから物語が始まる。彼は、Bly の屋敷で子供たちの教育をし、面倒をみて欲しいと彼女に頼むことになるのだが、その時の彼の台詞は “Give me your hand” である。ここには二重の意味があり、「子供たちの養育を）手伝って欲しい」という意味と、「結婚して欲しい」の両方の意味に受け取れる (Palmer 199)。無論、家庭教師は前者の意味で用いられたことを誤解するわけではない。しかしながら、“TS” の精神分析的解釈を知っている観客からしてみれば、この台詞は、最初から監督の立場が幽霊出現否定の側にあるという強烈な印象を与える言葉でもある。なぜなら、この言葉は、彼が Miss. Giddens に好意を抱いていて、Bly を訪れてくれるのではないかと彼女に期待を抱かせるには十分な効果があるからだ。そしてこの時、紳士の部屋に飾られている花がバラだ。このことに加えて、Quint が初めて塔の上に姿を現す時 (0:28:50)、家庭教師はちょうどその塔の下でバラを摘んでいるという設定も見

逃せない。このように Quint と紳士を結び付けるのは、精神分析的解釈の基本的な考え方であるので、その行き着く結論は幽霊の出現否定ということになる。念のため言い直しておく、幽霊は実際には出現していないけれども、彼女の雇い主に対する憧れ及び性的な衝動から家庭教師が Quint の幽霊を見てしまうというのは、精神分析的解釈そのままの読みである。このことが意味するところは、*The Innocents* には、James が“TS”において描こうとした意図ではなく、その後数十年に渡って議論されてきた批評家たちの解釈を脚本自体にそのまま取り込んでしまっているということになる。

さらに、*The Innocents* では、原作には出てこないが、廃れたキュービッドの彫像が Bly 邸の庭に飾られている。これについては、家庭教師の深奥に潜む性的欲望を表しており、Quint も何か性的なものと同連付けられている、という Raw の指摘がある (104-05)。幽霊が出現したと仮定する解釈にあっては、原作では Quint と Jessel が Miles と Flora に対して何らかの悪事を教え込んだ、或いは少なくとも道徳的に悪い影響を与えたであろうことが暗示されるが、その場合でも具体的にそれが何であったのかが示されるわけではない。しかしながら、*The Innocents* では、Quint が恐らくは Miles に性的な知識を吹き込み、彼が墮落したと暗示するような展開が随所に見受けられる。例えば、Miles の年齢の少年が、Miss. Giddens におやすみのキスをする時に、頬ではなく、まるで大人の男性でもあるかのように彼女の唇にキスをする光景は異様であろう (1:15:25)。最初はこの Miles の振舞いに戸惑いを見せていた家庭教師であるが、最後の場面では、Miles が息を引き取った時、彼の亡骸を抱いたまま、Miss. Giddens も同様に Miles の唇に口付けをしている (1:39:17)。この結末は、20世紀フォックス社の社長 Spyros Skouras が、Clayton に2週間の間1日おきに電話をかけてきて、変更を迫ったという曰くつきのエンディングである (Raw 105)。家庭教師が10才の少年を異性として意識して、大人に対するのと同様の愛情を抱いているとすればかなり異常と言えるだろうし、実際に映し出されている内容も、死体となった Miles に Miss. Giddens がキスをするという衝撃的映像である。単に Clayton が、スキャンダラスで娯楽的要素を取り入れ、商業的成功を狙った可能性がないとも断言はできない。しかし、原作にあっては、Quint と Jessel が働いた悪事については一切具体的な言及が見当たらないことを考慮すれば、ここまで家庭教師の性的な衝動を前面に打ち出した話の展開は、精神分析的解釈への極端な偏向と言えるのではないだろうか。

IV

前章では、原作の曖昧性ではなく、従来なされてきた精神分析的解釈自体を作品の中で再現しようとしている点を指摘した。もう1つ指摘しておきたいのは、原作の解釈を全く違う意味に取り違えてしまって、解釈に苦勞してしまうほどの外れな部分も存在しているという点だ。“TS”の最終章では、Miles は、幽霊が出現したと騒ぐ家庭教師に怯え、彼女に強く抱きしめられながら “Is she here?” (308) と尋ねる。実はこの時、Miles は恐怖から眼を閉じてしまっており、彼には Quint が出現しているのか、それとも Jessel が出現しているのかは見えていない⁷ため家庭教師に尋ねたわけだが、彼女には窓ガラスに Quint が顔をはりつけているのが見えているという設定だ。“TS”において家庭教師が幽霊を目撃するのは、殆ど彼女が一人である時だ。湖の畔で Flora と彼女が一緒にいる時に Jessel が出現するが、この場合も Flora 自身は幽霊のことについて一切触れてはいない。読者は、家庭教師が Flora にも Jessel が見えていると確信しているという彼女の主張を聞かされるだけだ (204)。それだけに、最後の場面は、Miles と家庭教師が一緒にいるところに Quint が出現したわけだから、今一度家庭教師以外の人物が幽霊の存在を確認し得る状況が再現されている重要な局面となる。それにも関わらず、Miles は固く眼を閉じている。Miles が眼を閉じていることによって、幽霊が出現しているかどうかの手がかりを読者に与えることなく

物語を曖昧なままにして、James は、彼の死をもってそそくさと幕引きを図る。この場面は、小説家の巧みさが存分に発揮されているところであり、誤読してしまうと作品の面白さを一気に削いでしまうことになるだろう。

では、この場面が映画ではどのように変更されているのかをみてゆくことにしよう。*The Innocents* では、子供たちは家庭教師から兄妹が会うこと、また Grose 夫人と会うことも禁じられる。いまや家庭教師の異常を疑わない夫人が Flora を屋敷から連れ出す。そして、Quint が出現したわけではないが、Miles は突然 “Is she here?” と家庭教師に問いかける。この部分について、Mazzella は以下のように説明する。Miles は、Grose 夫人が既に妹を連れだしたことは知っており、今度は彼女が自分を連れだしてくれるために Bly の屋敷に戻ってきたのかと思い、Grose 夫人が屋敷にいるかどうかを尋ねたものと指摘する (Mazzella 13)。Mazzella の解釈を1つの可能性として受け入れることは可能かもしれない。しかしながら、そもそも原作で用いられた “Is she here?” は、幽霊が出現しているのかどうかについて、読者に確証を与えないようにするために用いられた台詞である。Quint が出現していないにも関わらずこの台詞が発せられたことは、理解に苦しむ用いられ方と言わねばならないだろう。

結 論

Ⅲ章で述べたように、Clayton 監督は、“TS” を映画化するにあたっては、幽霊が出現していないという立場で脚色を施した。その脚色というのも、原作自体の持っている曖昧性ではなく、原作に対して提起された解釈を取り込んでしまうことによるものだ。その一方で、Ⅱ章で指摘したようなカメラワークという技術的な面では、観客に客観的事実として幽霊の出現を提示してしまっている。これは曖昧というよりも、1つの作品の中に一貫性を欠く相反する要素が存在していると言った方が適切な表現であろう。*The Innocents* は、1つの独立した芸術作品として観る場合には、興味深く仕上がっており完成度は高いと言えるかもしれない。しかしながら、原作の持つ曖昧性の再現に関する限り、成功していると評価するのは難しいのではないだろうか。

註

- 1 以下、“The Turn of the Screw” は “TS” と略す。
- 2 これ以後、“TS” からの引用は、本文中に頁のみを記す。
- 3 これ以後、*The Innocents* の特定の場面への言及は、上映開始後の経過時間時をもって示す。
- 4 When the governess sees Miss Jessel at the lake for the first time, it is again in two subjective point-of-view shots, one showing Flora and Miss Jessel in the same frame. These shots are followed by a third point-of-view shot with Jessel no longer in sight. By manipulating the appearances of the ghosts so that we see them only through the governess' eyes, or her subjective point of view ... (Palmer 211)
- 5 ショット：カメラが回り始めてから止まるまでの連続して撮影された映像。つまり、編集の入っていない最小単位のフィルムの一断片。区別は曖昧であるが、ショット、シーン、シークエンスの順で画面のまとまりは大きくなる (ジアネッティ 306)。
- 6 デイズルプ：2つの映像を二重焼付けすることによって、1つのシーンから次のシーンへ移行する方法の1つ。1つのショットがゆっくりと消えていき、それに重なって次のショットが次第に現れる方法 (ジアネッティ 308)。
- 7 “Is she here?” Miles panted as he caught with his sealed eyes the direction of my words. (308)

Works Consulted

Allen, Jean Thomas. “The Turn of the Screw and *The Innocents*: Two Types of Ambiguity.” *The Classic American Novel and the Movies*. Ed. Gerald Geary and Roger Shatzkin. New York: Ungar, 1977. 133-42.

- Allen, John J. "The Governess and the Ghosts in *The Turn of the Screw*." *Henry James Review* 1.1 (1979) : 73-80.
- Armstrong, Nancy. "Character, Closure, and Impressionist Fiction." *Criticism*. 19.4 (1977) : 317-37.
- Ballinger, Leonora M. "*Apparitions and Night-Fears*": *Psychosexual Tensions in the Ghostly Tales of Henry James*. Diss. New York U, 1996. Ann Arbor: UMI, 1996. 9931648.
- Beidler, Peter G. *Ghosts, Demons and Henry James: "The Turn of the Screw" at the Turn of the Century*. Columbia, MO: U of Missouri P, 1989.
- Beit-Hallahli, Benjamin. "*The Turn of the Screw* and *The Exorcist*: Demoniactal Possession and Childhood Purity." *American Imago* 33 (1976) : 296-303.
- Bengels, Barbara. "The Turn of the 'Screw': Key to Imagery in Henry James's 'The Turn of the Screw.'" *Studies in Short Fiction*. 15.3 (1978) : 323-27.
- Brooke-Rose, Christine. "The Squirm of the True: An Essay in Non-Methodology." *PTL*. 1.2 (1976) : 265-94.
- . "The Squirm of the True: An Essay in Non-Methodology." *PTL*. 1.3 (1976) : 513-46.
- Chase, Ronald. "Romancing the Stones: Jack Clayton's *The Innocents*." *Film Comment*. 34.1 (1998) : 68-73.
- Clark, Susan A. "A Note on *The Turn of the Screw*: Death from Natural Causes." *Studies in Short Fiction*. 15.1 (1978) : 110-12.
- Cook, David and Timothy J. Corrigan. "Narrative Structure in *The Turn of the Screw*: A New Approach to Meaning." *Studies in Short Fiction*. 17.1 (1980) : 55-65.
- Edel, Leon, ed. Vol. 4 of *Henry James Letters*. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1984.
- Edel, Leon and Lyall H. Powers, eds. *The Complete Notebooks of Henry James*. Oxford: Oxford UP, 1987.
- Faulkner, Howard M. "Text as Pretext in *The Turn of the Screw*." *Studies in Short Fiction*. 20.3 (1983) : 87-94.
- Felman, Shoshana. "Turning the Screw of Interpretation." *Yale French Studies*. 55/56 (1977) : 94-207.
- Grunes, Dennis. "The Demonic Child in *The Turn of the Screw*." *Psychocultural Review*. 2.4 (1979) : 221-39.
- Hallab, Mary Y. "*The Turn of the Screw* Squared." *Southern Review*. 13.3 (1977) : 492-504.
- . "The Governess and the Demon Lover: The Return of a Fairy Tale." *Henry James Review*. 8.2 (1987) : 104-15.
- Hill, Robert W., Jr. "A Counterclockwise Turn in James's 'The Turn of the Screw.'" *Twentieth Century Literature*. 27.1 (1981) : 53-71.
- Holloway, Marcella M. "Another Turn to James's *The Turn of the Screw*." *CEA Critic*. 41.2 (1979) : 9-17.
- Huntley, H. Robert. "James' *The Turn of the Screw*: It's 'Fine Machinery.'" *American Imago*. 34.3 (1977) : 224-37. *The Innocents*. Dir. Jack Clayton. Twentieth Century Fox. 1961.
- James, Henry. Vol. 12 of *The Novels and Tales of Henry James*. New York: Scribner's, 1971.
- Jolly, Roslyn. *Henry James: History, Narrative, Fiction*. Oxford: Clarendon, 1993.
- Kauffman, Linda. "The Author of Our Woe: Virtue Recorded in *The Turn of the Screw*." *Nineteenth-Century Fiction*. 36.2 (1981) : 176-92.
- Kenton, Edna. "Henry James to the Ruminant Reader: *The Turn of the Screw*." *A Casebook on Henry James's The Turn of the Screw*. Ed. Gerald Willen. New York: Crowell, 1960. 102-14.
- Korenman, Joan S. "Henry James and the Murderous Mind." *Essay in Literature*. 4.2 (1977) : 198-211.
- Mall, David S. "Designed Horror: James's Vision of Evil in 'The Turn of the Screw.'" *Nineteenth-Century Fiction*. 39.3 (1984) : 305-27.
- Matheson, Terence J. "Did the Governess Smother Miles?: A Note on James's *The Turn of the Screw*." *Studies in Short Fiction*. 19.2 (1982) : 172-75.
- Mazzella, Anthony J. "An Answer to the Mystery of *The Turn of the Screw*." *Studies in Short Fiction*. 17.3 (1980) : 327-33.
- McElroy, John Harmon. "The Mysteries at Bly." *Arizona Quarterly*. 37.3 (1981) : 214-36.
- Milne, Fred L. "Atmosphere as Triggering Device in *The Turn of the Screw*." *Studies in Short Fiction*. 18.3 (1981) : 293-99.
- Mogen, David. "Agonies of Innocence: The Governess and Maggie Verver." *American Literary Realism 1870-1910*. 9.3 (1976) : 231-42.
- Murphy, Brenda. "The Problem of Validity in the Critical Controversy over *The Turn of the Screw*." *Research Studies*. 47.3

(1979) : 191-201.

- Murphy, Kevin. “The Unfixable Text : Bewilderment of Vision in *The Turn of the Screw*.” *Texas Studies in Literature and Language*. 20.4 (1978) : 438-51.
- Nardin, Jane. “*The Turn of the Screw* : The Victorian Background.” *Mosaic*. 12.1 (1978) : 131-42.
- Obuchowski, Peter A. “Technique and Meaning in James’s *The Turn of the Screw*.” *CLA Journal*. 21.3 (1978) : 380-89.
- O’Gorman, Donald. “Henry James’s Reading of *The Turn of the Screw* : Part I.” *Henry James Review*. 1.2 (1980) : 125-38.
- Palmer, James W. “Cinematic Ambiguity : James’s *The Turn of the Screw* and Clayton’s *The Innocents*.” *Literature/Film Quarterly*. 5.3 (1977) : 198-215.
- Petry, Alice Hall. “Jamesian Parody, *Jane Eyre*, and “The Turn of the Screw.”” *Modern Language Studies*. 13.4 (1983) : 61-78.
- Raw, Laurence. “Hollywoodizing Henry James : Jack Clayton’s *The Innocents*.” *The Henry James Review*. 25.1 (2004) : 97-109.
- Recchia, Edward. “An Eye for an I : Adapting James’s *The Turn of the Screw* to the Screen.” *Literature/ Film Quarterly*. 15.1 (1987) : 28-35.
- Rimmon-Kenan, Shlomith. “The Figure in the Carpet.” *The Concept of Ambiguity : The Example of Henry James*. Chicago : U of Chicago P, 1977. 95-115.
- Robbins, Bruce. “Shooting Off James’s Blanks : Theory, Politics, and *The Turn of the Screw*.” *Henry James Review*. 5.3 (1984) : 192-99.
- Rowe, John Carlos. “Screwball : The Use and Abuse of Uncertainty in Henry James’s *The Turn of the Screw*.” *Delta*. 15 (1982) : 1-31.
- Siebers, Tobin. “Hesitation, History, and Reading : Henry James’s *The Turn of the Screw*.” *Texas Studies in Literature and Languages*. 25.4 (1983) : 558-73.
- Stapp, Walter. “The Turn of the Screw : If Douglas is Miles” *Nassau Review*. 3.2 (1976) : 76-82.
- Taylor, Michael J. H. “A Note on the First Narrator of ‘The Turn of the Screw’.” *American Literature*. 53.4 (1982) : 717-22.
- Tierce, Mike. “The Governess’s ‘White Face of Damnation.’” *American Notes and Queries*. 21.9/21.10 (1983) : 137-38.
- Timms, David. “The Governess’s Feelings and the Argument from the Textual Revision of *The Turn of the Screw*.” *Year Book of English Studies*. 6 (1976) : 194-201.
- Wagenknecht, Edward. *The Tales of Henry James*. New York : Ungar, 1984.
- Weisbuch, Robert. “Henry James and the Idea of Evil.” *The Cambridge Companion to Henry James*. Ed. Jonathan Freedman. Cambridge : Cambridge UP, 1998. 102-19.
- Weissman, Judith. “Antique Secrets in Henry James.” *Sewanee Review*. 93.2 (1985) : 196-215.
- Wilson, Val. “Black and White and Shades of Grey : Ambiguity in *The Innocents*.” *Henry James on Stage and Screen*. Ed. John R. Bradley. Houndmills : Palgrave, 2000. 103-18.
- 大津栄一郎『『ねじの回転』と幽霊』『ヘンリー・ジェイムズ研究』高橋正雄編 北星堂、1980年。
- 古茂田淳三『H・ジェイムズ「ねじのひねり」とその前後の小品』英宝社、2001年。
- 古茂田淳三訳『ねじのひねりー？正解のない幽霊物語？ー』ヘンリー・ジェイムズ著 あぼろん社、1993年。
- ジアネットィ、ルイス『映画技法のリテラシー I』堤和子他訳 フィルムアート社、2003年。
- 多田敏男訳『ヘンリー・ジェイムズ「ニューヨーク版」序文集』関西大学出版部、1980年。